



ノンフィクション

Writing
and
Selling

Non-Fiction



の
書き方



ヘイズ・B・ジェイコブズ
大出 健・白野恵子／訳

ノンフィクションの書き方 定価 880円

発行 昭和59年6月8日 第1刷

著者 ヘイズ・B・ジェイコブズ

訳者 大出 健・白野恵子

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替 東京8-3930

編集 株式会社 第一出版センター

東京都新宿区新小川町9番25号 日商ビル

郵便番号162

電話 東京(03)235-3051(代表)

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社 堅省堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り下さい。

送料小社負担にてお取りかえいたします。

© Ken Ohide 1984

Printed in Japan

ISBN 4-06-188551-0(0) (セ)



第十章 記事は積み木のようなもの…… 147

第十一章 文は人を表わす…… 173

第十二章 ユーモアは難物…… 185

第十三章 こんな点がわからないのですが？ …… 191

第十四章 最も危険な落とし穴…… 204

訳者あとがき…… 213

Writing and Selling Non-Fiction

**Copyright © 1968 by Hayes B. Jacobs
Published by Writer's Digest Books
Japanese translation rights arranged through
Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo**

目次

はじめに……………7

第一章 書くことを日課に……………10

第二章 売れる題材を探せ……………22

第三章 「適切な」アイデア……………37

第四章 「適切な」買い手……………48

第五章 取材——見て、聞いて、調べ上げる……………58

第六章 インタビューのやり方——単なる事実以上のものを……………77

第七章 資料の洪水にいかに対処すべきか……………101

第八章 的確な表現形式を探る……………114

第九章 あざやかな書き出し——冒頭部分の書き方……………132

第十章 記事は積み木のようなもの……………147

第十一章 文は人を表わす……………173

第十二章 ユーモアは難物……………185

第十三章 こんな点がわからないのですが？……………191

第十四章 最も危険な落とし穴……………204

訳者あとがき……………213

装幀 渋谷育由

はじめに

ノンフィクションを書き、それを売るといふ過程の中でぶつかる問題には、最終的な解答などあるはずもない。もし、われこそ解答を持っていると自信ありげに言う者があるとすれば、まずまやかしと思つてよい。

だから、わたしの言うことにも警戒の耳を持つてほしい。わたしとて自分の仕事には並々ならぬ愛着を抱いており、従つて、だれもがわたしのやり方にならうべきだと言つたり書いたりすることも、なきにしもあらずだからだ。本書には数多くの教えが含まれている。しかし、それらの多くは規則や公式ではなく、あくまでも提案であり、ガイドなのだ。

読者は本書で何を得ることができようか。

まず第一は、プロのライターの仕事の現場を手にとるようになることが出来る。これは大仕事なことだ。どんな種類のものであれ、読むに耐え、売れるノンフィクションを書くことは、仕事であると同時に芸術的側面をもっている。仕事のテクニクと手順については、よい教師と適度な素質さえあれば、比較的容易に学ぶことができる。しかし、芸術的側面はちょっと違う。とらえにくく、従ってうまく説明することがむずかしい。いわば「感じとる」以外に学ぶ方法がないのだ。これを体得する最善の方法は、おそらく、ライターのかたわらに何日も何週間も、あるいは何か月も坐りつづけ、ことあるごとにライターが何をやり、何を考え、どう感じ、それはどうしてなのかを聞き出すことであろう。だが、それは實際上、不可能である。このことを念頭に置き、わたしは本書で、多少なりともこのような個人的接触に代わる要素を盛り込むように努め、芸術的側面を感じとってもらえるよう努めたつもりだ。

第二には、ノンフィクションを書く上での「技術的」側面を学ぶことができる。多くのライターは少なからぬテクニクと、いくつかの共通のルールに従って仕事をしている。読者が真に独創的な自分の作品を書く段になれば、もちろん自分の知力と資質と習慣に合った仕事のやり方を発見しなければならなくなる。しかしそれまでは、ルールに従ったほうが結局は時間と労力の節約になるといえるものだ。プロのやり方に従い、それをまねれば、自分はアマチュアだという感じから少しでも脱することができ、ひいてはできあがった作品が、よりプロらしくなるものなのだ。

第三には、できあがった作品をどう売るかという困難な問題に対して、アドバイスを受けることができる。出版市場は新人ライターにとって、確かにわけのわからないところであり、往々にして不親切である。編集者と取り引きするのは容易なことではなく、意気沮喪の種にはとかなない。しかし、あえて言いたいのが、編集者の多くはライターにとって有用であり、かれらと知り合いになることは楽しいものである。

ヘイズ・B・ジェイコブズ

第一章 書くことを日課に

時間を決めてせっせと書く

ライターがすでによい題材をみつけており、書く能力があり、どこにどうやって売り込んだらよいかを知っていて、用意万端ととのっているとしたら、すばらしいことだ。

しかし、それでも十分ではない。わたし自身を観察し、他の多くのライターたちとつき合い、大学の教室で何百人ものライターの卵を相手にしてみても、もの書きという職業にはさらになにかが必要であることがわかってきた。そこで、本筋を語るのが遅くなるおそれを承知の上で、簡単にではあるがそのなにかについて、わたしの考えを述べておきたい。

わたしの言いたいのは修練ということである。ライターは修練を積み重ねなければ、なにものも書きあげることではない（書くことは、わたしの恩師のハワード・マンフォード・ジョーン

ズの指摘どおり、「生物学上の基本的要求ではない」のだ。だからこそ、書くことを規則的な習慣にしなければならぬのだ。毎日、同じ時刻に書き始め、同じ時刻に終わるという、決められた日課を喜んでこなすことである。

同じ時刻に終わる？ ライターは残業をすべきではないというのだろうか？ わたしはそう考えている。長時間にわたって机にかじりついていれば、大量の原稿は書けるが、かなり疲労することにもなる。その結果は次の日に予定どおりに始めるのがいやになったり、能率よく仕事ができなくなったりするのだ。あるライターが十八時間ぶっつけでタイプライターを打っていたと聞いても、驚くことはない。そんなふうに仕事をするライターをわたしも数人知っている。そういったライターはほとんど例外なく、神経をすり減らすタイプで、自分自身を徹底的に、無感覚になるほどの疲労に追い込み、大量のカフェインやアンフェタミンをとって無理に気力を奮い立たせ、そして大量の仕事を完了させた後は、疲労回復のためにウイスキーをがぶ飲みするのだ。このサイクルも数日間、あるいは長くても数週間は続けることができ、その中で良い原稿が生まれることもある。しかしその後は、問いつめられれば彼ら自身も認めるように、長いあいだ、ライターとしてはまったく使いものにならないのが普通である。

「嵐のような勢いで書いている」彼らがそう言うのを耳にする。

その後、彼らは爪をかみながら、こんなふうに言う。「ここ二、三日は一語も書いてないんだ」。そして、言いわけを考える。ひどくつらい仕事だから休息を取ったんだ。いけないかい？

そんなことはない。休息は取るべきだ。だがたいいの場合、彼らが仕事に戻るまでには、かなり長い時間がかかるのである。仕事に対する意欲がなくなってしまうのだ。目が悪くなり、新しい眼鏡がいるかもしれないなど考える。不眠に陥り、睡眠薬のお世話になる。一日に何箱もたばこを吸いつづける。そして、二日酔いでふらふらする。ひどいものだ！これが休息だろうか？

休息が長びくと、やがて彼らはそれをスランプと呼び始める。彼らの総生産量は、一ヵ月とか一年の長い期間で見ると、頻繁に短い休息をとり、着実に、適当な時間内に仕事をした場合の量よりも少ないのが常である。（こういつたライターの中には、「休息期間」を病院ですごしたり、永久に休息期間を楽しんでいる者がいることを、わたしは知っている。）

ものを書くという作業は、精神的にだけでなく、肉体的にもかなり疲労する。ごく普通の健康人が書けるのは六時間から八時間のあいだで、それ以上働くと、明らかに疲労の徴候を示すのである。集中できる時間が短くなり、物おぼえが悪くなり、疲労感を覚え、山ほどのまちがいをする。そのときこそ仕事をやめて、気晴らしをし、くつろぎ、休息をとるときなのである。

やる気が出るまで待つな

フルタイムで書くのを仕事にしていようが、趣味で書いていようが、「毎日書くこと」を、わたしは勧める。仕事を始め、そして終える適当な時刻を決め、気分に関係なく、どんな誘惑

にも負けずに日課をしつかり守ることを心がけたまえ。そのほうが、やる気やインスピレーションを感じる時、あるいは締切りが目前に迫っているときに、長時間がむしろに書くよりも、ずっと大量の原稿をこなせるだろう。(イタリアの小説家モラビアはこう語っている。「わたしはインスピレーションを信じているが、それは感じる時と感じない時がある。しかし、インスピレーションを感じるまで、待つてはいない。わたしは毎日仕事をしているのだ」。成功している作家の大部分は同じことを言うだろう。)

わたしがかつてフルタイムの仕事を持っていた、片手間にフリーランスで書くころとしていたときは、何年ものあいだ、ライターとしてはたいした仕事もできずにいた。今でこそはつきりとわかるのだが、それはただ予定を守ることができなかったからなのだ。夜は疲れて書くことはできなかったが、それでも断続的には書くようにしていた。土曜と日曜を書くことにあてていたが、たいていは社交上のあるいはその他の義務や誘惑でつぶされてしまった。月日は流れていくのに、原稿はほとんどたまらない。(ライターは冷酷に、絶対確実に原稿を作らなければならぬ。覚え書きでも、メモでも、タイプした断片でもなく、ちゃんとした原稿を、である。言葉を組み立て、文を作り、パラグラフを完成させ、一ページを仕上げ、しかもそのページは前後のページときれいにつながり、章全体と作品全体が調和を保ち、つじつまがあっている……それが原稿である。)

ついに、ある記念すべき夜に、アイデアがひらめいた。これを思いつくまでの期間の長さは、

いわば頭の鈍さの世界記録だった。わたしは自問してみた。夜書けないのなら、朝書いてみたかどうか？

わたしはやってみることにした。目覚まし時計をいつもより一時間早くセットし、ベルが鳴ると、本当に起きてタイプライターに向かい、一時間書いた。それから会社へ出かけた。次の日も、また次の日も、同じスケジュールを守った。三ヵ月間、ただの一日も日課を変えなかった。十本以上の原稿をものにするのができ、三ヵ月後には、初めて全国誌に原稿を売ることができた。『ハーバーズ』が短編を採用してくれたのだ。わたしは郵便箱のかたわらに立って、自分の文章が印刷された雑誌の配達を心踊る思いで待った。

数週間後には、『サタデイ・レビュー』が短い記事を、『ニューヨーカー』が軽いエッセイを、そして『エスクアイア』が短編を採用してくれた。これまでは「ノー」と言っていた編集者が「イエス」と言い始めたのだ。そしてさらに原稿を依頼されるようになった。（『ハーバーズ』の採用通知には、次のような一文があったことを、ここで述べても不都合はないだろう。「ノンフィクションをてがけるつもりはおありでしょうか？」）

それ以来、わたしは着実に原稿を売ってきた。この変化は、急にライターとしての腕を上げたからではない。突然、無精な自分を奮起させ、規則的に書き始めたからである。

会社をやめて、完全にフリーのライターになったときは、もはや五時半や六時に起きる必要はなくなったのだが、すでに習慣となっていた。そしてまず何時間か書くことから、一日が始

まった。日曜や祭日もふくめ、毎日書いた。休暇に出るときにも軽いポータブル・タイプライターを携行して、毎朝、一時間か二時間は書いた。ある特定の仕事を仕上げなければならぬのではなく、身につくまでに長くかかった習慣を崩さないためである。とにかく毎日書き続けることは、わたしにとって非常に重要な仕事の儀式であり、原稿という形の結果を生み出す習慣なのである。「ライターになったような気分がする」だけでも価値がある。そして、ライターになったような気分になるには、ライターがするようなことをすればよい。つまり、規則的に机に向かって、原稿を作るのである。

それがたやすいことではないのは確かである。しかし、やってみるべきである。朝早く仕事をするなんて不可能に感じられるかもしれない。つまり、あなたは「夜型人間」というわけだ。心理学者は、実際に「夜型人間」と「昼型人間」が存在する、と言っている。しかし、もし昼間の仕事を持っていて、それで給料をもらっているのなら、たとえば夜型人間であるとしても、一日をわずかに一時間だけ早く始めるのは不可能ではないだろう。

自分を甘やかしてはならない。また普通の人ができることとできないことについての迷信的な考えにとらわれてはならない。ライターになるつもりなら、月並みな努力以上のことができないならならぬのだ。

夜型、昼型人間のことは忘れなさい。この年では身についた習慣を改めることはできないのだと言っただけではない。「やる気」や「インスピレーション」についての、くだらない話は忘